

『5人の王』

著：恵庭

ill：絵歩

「5人の王」

「妹のためなら、なんでもする覚悟があると言ったな」

「あります」

「では、いますぐ私の所有物になれ」

「……所有物」

「不服か？ 死でも奴隷でもいいと言ったのは、おまえだ」

「何をお考えなのですか、シャー」

険しい口調で、シアンが言った。

「名案だと思わないか。ヴァートが青の王の所有物に手を出したとなれば、あいつを殺した口実になる」

青の王は、どこか得意げにそう言った。それから思い出したように俺を見て、「おまえの名は？」と尋ねた。

俺は二度と使うことはないと思っていた名前をくちにした。

「セージ」

俺たち兄妹は、西方の山奥にある、湖のそばに捨てられていた。

子どもの死体など当たり前に転がっているような街で、俺と赤ん坊だったヒソクが生き延びられたのは、ずいぶんと運が良かったのだと思う。

赤ん坊を亡くしたばかりの母親が、俺たちを不憫に思い、家に連れ帰ってくれた。山羊を飼い、その乳や肉を売って、細々と生活している家だった。

しかし、ヒソクが7歳を迎える前に、疫病のせいで山羊が全滅してしまった。どうにもたちゆかなくなって、俺たちは奴隷商に売られた。

奴隷として、新しい家で働くことになった。本当なら、もつとずっと悪い条件があるはずだったのに、慈善家と名高い主人は優しくかった。

ときおり俺を、裏の小屋に引っ張りこんで、少年趣味にふけるくらいで、それ以外は食事と寝るところも与えられた。

ヒソクは、主人が来る前に泣きだすことがあった。

「セージ、行かないで、外に出たら悪いものに食べられてしまう。ここにしよう」と、泣いてだだをこねた。

俺は妹が泣きつかれるまであやして、それから、今日も主人が呼びにくるのだなと思うのだった。

ヒソクは不思議な子どもだった。

前の家で世話になっていた頃にも、疫病がはやる少し前、山羊の肉は絶対に食べるなど言った。

山羊の肉は商品で、家では湖で獲れる魚を食べることがほとんどだったが、ある時、母親がふんばつして捌いてくれたそれを、ヒソクは湖まで運んで沈めた。

おそろしいほどに怒られても、「セージがいなくなっちゃうから」と言って、涙ひとつ流

さなかつた。

星を見上げていたかと思えば、「東のほうで怖いことが起きる。牛と蛇が戦ってるの」と、知らない土地の話をするのだった。

数日して、東の街で争いが起きたと聞いた。彼らの掲げた旗に、牛と蛇が描かれていたと知った。

カンのいい子どもというくりに超えた時、妹の才能に目をつけた男たちが、ヒソクをさらおうとした。赤毛の男を筆頭とした集団は、街はずれの貧民窟に住む、ごろつきだった。

術師をうたって、街の民から食べ物をわけてもらおうとしていたが、彼らの中にヒソクほどの能力を持った者は、ひとりとしていなかった。

占いのできる娘がいると評判になり、ごろつきたちの評価は持ち直した。

彼らから、ヒソクは『星見』だと教わった。星見とは『サキヨミ』という能力の一種で、サキヨミは予知のできる術師の名称だ。

王宮や貴族たちにも重宝され、戦の多い時代には、軍にもサキヨミが雇われていた。ごろつきたちは、ヒソクに星をよむ方法を尋ねたが、妹にとってみれば当たり前のことのように、説明できないと言って彼らをはっきりさせた。それでも、彼らは俺とヒソクを可愛がってくれた。

そんな時、王宮から、『星見のヒソク』を召喚するという連絡がきた。どうすればヒソクのしあわせになるのかを、何度も考えた。

王宮の術師は、側女としても扱われることが多いと聞いて、俺は心を決めた。

妹が慰み者にされる恐怖に耐えられなかった。屋敷の主人がヒソクにまで手を出そうとした時も、俺はなんだってした。

俺はごろつきたちに、ヒソクをつれて逃げてくれるように頼んだ。彼らにとっても、術師としてのヒソクは、手放せない存在だった。

俺も一緒に逃げたところで、王宮の追手がくれば、すぐに追いつかれてしまう。時間を稼ぐために、俺は女物の布を巻いて、ヒソクのふりをすることを思いついた。

王宮からの召喚を断れば、どちらにしろ俺たちには死が待っていた。

ヒソクと別れる夜、降りそうな星の下で、小さな手をにぎりしめた。最後になるだろうとわかっていたから、ずっと妹の寝顔をながめていた。

やわらかい布が敷かれた寝台に、乗るのは初めてだった。

街の人の寝る場所は石か木できていて、布をシーツとして敷くぐらいのことはしたけれど、布が重ねて置かれているのかずいぶんとふかふかしている。

後ろから身体を押し付けられてその体重を受け止めても、ひざは痛くならなかった。「子どものくせにずいぶんと手慣れているな」とあざ笑われた。

自分で尻の穴にそそぎこむよう言われた油は、甘く澄んだいい香りを放ち、部屋の中いっぱい立ちこめていた。

たぶたぶするまでそれを指で押しこんで、狭いところを広げれば、少しはあとが楽だと知っているのでそうした。

四つん這いで腰をあげさせられて貫かれたのが、記憶よりもずっと生々しかったので、ただ声を出さないように気がついた。

狭い入口にためらわず性器が押し込まれたので、足先が痙攣してしまった。

含んでおいた油が質量で外にあふれ出てきて、内股までたれてぬるぬるになってし

まう。

ゆっくりと奥まで達したと思ったのに、さらに奥をつきあげられて、胃まで圧迫されてうめく。

いじめられた内臓が悲鳴を上げていたけれど、男はそれ以上動くこともなくじっとそのままでいたので、広げられた穴も内側もつらくなって、はあと息を逃がした。

弱った声を出してしまいそうで怖い。

ふいにまわされたてのひらでくちをふさがれる。

声を出すつもりはないと言いたかったけれど、目的は他にあったようで、大きなてのひらからは油と同じ匂いが香っていた。

「息を吸い込んでみろ」

指のすき間から入ってくる空気は少なく、苦しさに耐えきれず言われるまま肺いっぱい吸い込んだ。

途端に眼球が回転したような衝撃を覚えた。

甘いにおいが吸い込んだはしから血に溶けこんで、体中を駆けめぐる錯覚が起こる。まともにそれを受け取れなくて、頭がクラクラとゆれて身体を支えていた腕に力が入らなくなった。

その場に倒れこみそうになったが、腹にまわされた腕がそれを許さなかった。

「は、あ」

耳の後ろがうるさいほどにどくどくと脈打っている。

受け入れていた場所が勝手に中を締めつけようとするのが、自分の身体のように思えなくて、噛みしめていたくちびるがふるえた。

「内側に入れるよりもこちらのほうが効くみたいだな。すぐにその高い自尊心をかなぐり捨ててすがりつくようになる」

「自尊心、なんてない、です」

「挑発にのってすぐに言い返すところがその証じゃないか」

そんなふうには言われたことはなくて、身体をつらさよりもさいなまれた。

「アンバルははじめてか？ 動物の分泌液は甘ったるくて腰にくるだろう」

医療用の薬草すら高価すぎてろくに手に入らない貧困の街で、こんなものを塗り込められた経験などあるわけがなかった。

ようやく内側が大きさに慣れてきたところで、性器を半分ほど引き抜かれる。

中はその形に慣れすぎていて、抜かれるのを嫌がるように襞がまとわりついて追いかけてようとするので、ゆっくりした動きは内側のざらついた感覚までも呼びおこす。

「うう、ん」

背中にいっぱいの鳥肌を浮かせて、俺はくちびるを噛んでその刺激に耐えようとした。

けれど、のどが鳴るくらい息を止めていたあとで、思い出したように性急に腹の奥につきいれられたので「ああっ」とかん高い声もれた。

自分の出した女のような声すら耳に心地よくて、俺の身体は反応した。

「ふっ、あ、あん。やああ」

抽挿がはじまって、俺は引き抜かれるたびに声をもらしてしまう。

まだ最初のうちだというのに体温が一気に上昇して、ぽたぽたと汗が首をつたう。

「嬌声だけはごちないな。相手は、そういうのが好みだったか」

腰をぐっと敷布の上に押し付けられると、角度がかわって下腹部への衝撃が強くなった。

「うあっ、やだ」

素直にそうくちにしてしまうと、身体は正直で浮かんでいた汗は冷たくかわって肩が小刻みにふるえだした。

顔と受け入れている後ろだけが異様に熱くて、俺のことなど無視して何度も出し入れされる。

もう苦しさすら感じなくて、ぐちゃぐちゃした音がもれるたびに、腰がしびれた。

「う、うう、んっ」

立ち上がった性器が布にこすられる刺激に負けて、腰をすりつけた。

射精感もないのに自分が出したものでぬるついて、それすらも気持ち良くなってしまふ。

無意識に腰が下へ下へと落ちていたようで、それに気づいた男にまた腰を抱えあげられる。

断続的な性器への刺激が急に取り上げられて、快感を追うことだけに夢中になっていた俺はとり乱した。

「あ、ああいやだ」

もっと、もっとしたいと思って、頭がその言葉だけでいっぱい埋めつくされる。

行為中に自分がどうこうしたいなど思うことはなかったので、未知の欲求に焦れた。母屋に聞こえるから、声は出すなと言われていたのに。

浅く息を吸い込む。甘い香りがそこらじゅうに漂っていて、空気を吸い込んだ。

「はあ、あん、気持ちいい、いい」

たまらなくなつて腰をゆらめかせかけると、くちをふさがれた。

香りの残滓はわずかだったのに、俺はびくびくと痙攣しながら射精して白いものを吐きだす。

「は、んうっ」

ぐもった声を上げて、出しつくす。荒い息を逃すこともできず、酸欠で目まいがした。耳もとに熱い息がかかる。

「死か、奴隷、と言ったか」と、この上なく楽しそうに笑った。

「ずいぶん、ラクな道が残っていて良かったな」

熱に浮かされた頭は、一気に正気を取り戻した。硬さを保ったままの性器が引き抜かれる。

俺は男の脚のあいだに這って、油でべとつく性器をくちに含んだ。

舌をからめて、丁寧に油をなめとり、必死になぐさめていると、前髪をつかまれて上向かせられた。

くちに含んだものを離されると思って、両手で根元をおさえて、くちびるに力をいれる。

歯があたってしまって、青の王はわずかに顔をしかめた。

「ヴァートの言うことも、あながち間違いではなかったな。この緑に、上目づかいで見られるのは悪くない」

予想外に満足そうな声が降ってきて、俺は意外だった。涙のたまった目のふちから、涙がゆるくあふれ出た。

きゅっと、親指でぬぐわれる。

俺はあわてて、自分の手で涙をぬぐった。こんなことまでしているのに、不興を買ってしまうのはいやだった。

くちの中でしごきあげると、油とは違う味が浮いてきたので、亀頭に吸いついてのどをこくりといわせた。

そのうちにまた、自分まで気持ち良くなってきたように思えて、腰をあげた格好をとるのがつらくて生理的な涙がこぼれた。

頑張ってみたけれど射精まではさせてもらえず、仰向けに寝転がされる。

空には見たこともない薄い黄色の布がかけられていて、すすけた赤茶色の天井がやわらかく覆われていた。

またどろりとした油を下腹部にたらされて、さすがに泣きが入った。

ふるえる指を液体にからめて、ひざを広げて奥のすぼみに少しずつ含ませる。

もうそんなことをしなくても受け入れられるほど解れていたけれど、いっそ冷徹とも見える男のまなざしは許してはくれなかった。

きゅ、と一番長い指を奥まで埋めたら、自分のものなのに背筋に寒気が走った。

浮かせたひざがふるえたけれどさらに開き、はしたない格好のまま俺は指を出し入れして痴態をさらし、男を誘った。

「入れてください」と、泣いた。

甘い香りで気を失いそうだった。そのまま失神してしまえたら、どれだけラクかと痛感した。

そして、両腕を身体の横で固定されたまま、何ひとつ自由にならず、身体をゆさぶられるのは、死ぬほど気持ち良かった。

今だけは、全部忘れてしまいたかった。

腰をうちつけられる熱さに、声も出せずに涙をながした。

胸もとの、鎖骨の下あたりが、急激に熱を持ちはじめる。焼きごてを押されたかと疑うほど、痛みが増した。

身体をふるわして泣き始めると、青の王が「じっとしている。痛みを感じるのは、一度目だけだ」と言った。

俺の腹に飛び散っていた、油と精液のまじったものをすくいにとって、俺のくちにぬりつけた。甘い匂いをかけば、痛みは少しだけまぎれた。

夜風が吹きこんで、ようやく淫蕩な香りが少しだけ薄れた。

うとうとしていると、青の王は、俺の胸元をなでた。浮き出た鎖骨の下に、鳥の羽を思わせる両翼がしるされていた。

目がさめるような青色の刻印は、ひどく不気味に思えた。

「ティンクチャーといって、王の所有物になった証だ。抱いた直後はくっきりとしているが、だんだんと薄れて四十日ほどで消える。他の王がこれに触れれば、反逆とみなされる」

そう言って、確かめるように強く羽をなぞるので、俺は痛みをうめいた。火傷のようにひりひりしていた。

「しるしの消えた女は白の女といって、誰に手をつけられてもかまわない存在になる。誰かれかまわず抱かれるのが嫌なら、青の術師としてそれらしくふるまうことだ」

「術師……？」

突拍子もない言葉に耳を疑い、思わずかすれた声を上げた。

部屋の四隅にしつらえた明かりのせいで、寝台に腰かけた青の王の顔は、ちらちらと火の光であぶられた。

「おまえはこれから星見を名乗り、青の術師ヒソクとして生きろ。ヒソクが女だと知る者など、王宮にはいない。おまえが言い張れば、なんとでもなる」

「ヒソクとして？」

「そうだ。妹の名で」

「あの……シャー、俺には妹のような能力はありません。先のことはわからないし、遠くのものを見ることもできないのに、星見のふりをするなんて無理です」

「無理かどうかではなく、妹の命にかけてやり通せ。妹を助けられれば、死すらおそろしくないと言った。その約束を果たすのが、おまえの務めだ」

「やりとげれば、妹は見逃していただけますか」

青の王は、酷薄にほほえんだ。

「そういう、さかしい物言いは私の好みではない。覚えておけ、私の機嫌をそこねて痛い思いをするのは、おまえのほうだ。しるしが消える前に抱きにくるから、そのつもりでいろ」

青の王はそれだけ言うと、部屋の隅に待機していた侍従に、「水を浴びにいく」と声をかけた。

男の背には、細い筋肉がいく筋にも浮き上がっていた。後ろ姿を目で追いながら、俺は「ヒソクになる」とつぶやいた。

幼くて可愛らしい妹は、甘ったれた声でいつも俺を、「セージ」と呼ぶ。

俺は目を閉じて、布を頭まで引っ張りあげた。